

ミステリ読書案内

2024. 5. 6 発行元

第572号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

最近出た本の中から

2月に出版された本の中から四冊を取り上げてみることにする。いずれもシリーズ化された作品の中の一つ。「美術ミステリ」を二作取り上げた。歴史的な美術の名品が登場するのが嬉しい。絵を見るのは楽しい。

能登半島地震のその後

2月末あたりから地震の科学的な分析が出始めている。日本列島の成り立ちから、日本海がどのようにしてできたかを説明し、それに最近のプレートの動きの方向のずれやスピードの違い…と分析が加えられ、岩盤にかかる力の実態が見えてきているようである。

また、富山湾の海底地滑りや海底断層による崖の実態も調べられるようになり、津波発生のメカニズムについても触れられるようになって

て来ている。こうしてみると、能登半島の地下の構造は複雑であり、脆弱性を持つ箇所が多いので、志賀原発の重大事故に繋がらなかったのは不幸中の幸いかと思ってしまう。日本列島の地下構造を調べていくことは今後も大事になるだろう。

東日本大震災から13年の日が過ぎた。13年経った現在ハッキリしてきたこともたくさんある。長い目の視点が大切なようだ。それにしても東京電力福島原発の廃炉作業がどこまでもずれ込んでいくことが気がかりである。

加藤実秋「刑事ダ・ヴィンチ3」

2月に双葉文庫から出た本。シリーズ三冊目。「ダ・ヴィンチ刑事」と呼ばれる南雲士郎と、彼とペアを組む小暮時生刑事が主人公。連続猟奇殺人鬼で美術作品に見立てた事件を引き起こす「リプロマダー」との対決を描くストーリー。でも、なぜか加藤実秋ミステリにしては流れが今一つ。事件の展開も登場人物の会話も波に乗れず…、読み進むペースが上がらない。まともに警察小説仕立てなのが響いているかもしれない。本書では、前作でリプロマダーらしき人物が出るのだが、どうも誤認のようだということから始まる。ダ・ヴィンチ殿の動きもパッとせず、小暮刑事のみがひたすら空回りする。次作に続く…の流れ。

一色さゆい「ルーヴル美術館の天才修復士コンパターⅣ」

2月に幻冬舎文庫から出た本。3月に続巻『ダ・ヴィンチの遺骨』が出る予定で、本書は前半部分に当たると言ってもよい。このシリーズ、美術・絵画についての知識・情報に安定感があり、他作家の美術ミステリに比べてどっしりした落ち着きを感じる。

本書から舞台はルーヴル美術館に移る。修復士ケント・スギモト、そして糸川晴香が彫刻「サモトラケのニケ」の修復作業を共同で行うためである。そして、ルーヴルで待ち受けているのは…。第一章はニケ絡みの出来事。第二章はカフェで出会うピカソ作品、第三章はコロの風景画、第四章はドラクロアによるショパンの人物画と登場してくる。美術好きには馴染みのある作品が関わっていて、実際の作品が目に見え、興味深い。

矢月秀作「もぐら0 影野竜司」

2月に中公社文庫から出た本。題名の通り『もぐら』シリーズ開始前の「思い出話」を集めた内容。榎山誠吾が安達紗由美、古谷節子、安達真昌を前にして、高校生時代、警察学校時代の思い出を語る形で話が進んでいく。

五十年ほど前、榎山は新宿にある私立高校に通っていた。進路をどうしようかという時期に長尾進太郎と出会い、地域の暴力団の準構成員グループを叩きのめすことに…。その流れの中から無理やり警察学校に入校することになり、そこで影野竜司と宇田桐善康と同じ部屋となる。新宿を中心にした暴力団などの争いが連続して勃発することになり…という話。

知念実希人「放課後ミステリクラブ3 動くカメの銅像事件」

2月にライツ社から出た本。児童書。シリーズ三作目になる。シリーズ一作目の『金魚の泳ぐプール事件』が本屋大賞候補としてノミネートされ、突然注目を浴びるようになった。新刊書店の目立つ棚に並ぶのを見ると嬉しくなる。ジュヴェナイルのミステリが取り上げられることは喜ばしい出来事だ。

本作でも小学四年生の放課後ミステリクラブの三人、柚木陸、辻堂天馬、神山美鈴は元気に活躍中。今回は校庭の隅でカメの銅像を発見するところから話は始まる。一日の間にわずかに動いたように感じられたのだ。大人数人でも動かせないような重量の像がなぜ？どのようにして？謎を解明するように依頼された三人はまず現場の調査から。目撃者から話を聞いている間に、上級生が飛び入りし、真理子先生も加わって、アゲハチョウも…となる。まあ一応「読者への挑戦」も設けてあるのだが、今回の謎はそれほど…。相変わらず挿絵がたくさん入っていて、そこにもヒントがあり…で、楽しく読める。